



柳田國男の學問と思想は、今日の病害を離れる。日本社会における第四の道として優秀な可能性を秘めているとわたしは述べた。そのためには、今日の日本のすべての学問や思想が、柳田學に向かって、積極的にそれまでの領域における検証作業が求められるべきである。そのためには、今日の日本のすべての学問や思想が、柳田學に向かって、積極的にそれまでの領域における検証作業が求められるべきである。そのためには、今日の日本のすべての学問や思想が、柳田學に向かって、積極的にそれまでの領域における検証作業が求められるべきである。

まことに、近代の構築が個の形

業である。

柳田國男と現代

生誕100年 その展開

成をめぐって展開され、その苦汁の歴史こそが、実は日本近代史を価値あるものとしていたのである。そのものであったといふのである。

だが一般で「日本」とは、そうして精神史なら、思想の「ノーブルな

研究が有りしがれだといふことは、わたしたちの共通の反省的認識である。じこにわたしたちの不幸があつた。

は、わだしたちの共通の反省的認識である。じこにわたしたちの不幸があつた。

は、わだしたちの不幸があつた。柳田國男の學問が明治國家精神が、「たいた」の方針である。柳田國男の學問が明治國家精神が、「たいた」の方針である。柳田國男は著述、追究していく。柳田國男は著述、追究していく。

が、大正時代、日本人とは事

が成じて、日本人とは事

に不幸な経験ばかりを所有してきたといふ、わたしたちの国の徒勞があつたといふ。しかし、それは不可能なことで、神史の構築は可能だと、たゞ元の名著『日本の書』のなかで、ヨーロッパの文化を薦める。日本のそれが低いものと看えた、明治近代以降の日本の国家の偏見、いうじのなかにあつたといふ。その場合、すべての領土における検証作業の指標は、領土の形成と共同体、というテーマといふ。あるいは、それもあつて、日本精神史の構築的構築

の歴史と眼を向けさせないといふ。しかし、この歴史表現され、それがいつ否定しよと消し去る道をたどる」とによつて、遂に日本のフレームを構築して明日になにがくるかのマイナスであるかといふ、柳田國男が考へて、その普遍性を確めていく。そこで、そこは発見されたもの、つまり「筋の飛石」ではある。柳田國男の學問が明治國家精神が、「たいた」の方針である。柳田國男は著述、追究していく。柳田國男は著述、追究していく。

が、大正時代、日本人とは事

が成じて、日本人とは事

</div